

平成 30 年 5 月 18 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02833

研究課題名(和文) 空間解析を通じた日本古代地域社会の研究

研究課題名(英文) A Study of Regional Society in ancient Japan using spacial analysis

研究代表者

今津 勝紀 (IMAZU, Katsunori)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：20269971

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、空間シミュレーションの手法を活用して国・郡・里の編成原理を検討した。吉備全体の里の比定を実施し、このうち備前と美作について具体的に検討した。備前国では北部六郡が和銅六年に美作国として分離されるのをはじめとして、東南部で郡の分割・再編が頻繁に行われる。令制当初の赤坂郡が陸路では山陽道を、水路では吉井川を骨格とし、邑久郡は播磨国境までの海岸部分全体を領域とし、天平神護二年に藤野郡が拡大し、延暦七年に吉井川の東西で和気郡が分割される。山陽道についていえば、和気郡に坂長駅家、磐梨郡に珂磨駅家、赤坂郡に高月駅家がおかれ、最終的な決着をみる。これらの領域編成の本質は道にあった。

研究成果の概要(英文)：This research examined the formation principle of the Kuni, the Gun, and the Sato for ancient Kibi by using the Geographic Information System. About the ancient administration, regional presence is a problem. Therefore I calculated distribution directivity how Sato was distributed spatially.

In Bizen country, Northern six Gun are separated as Mimasaka in 713. After that, in the southeastern part of Bizen, the division and restructuring of the Gun was frequent. Akasaka at the beginning of the 8th century was organized around the Sanyo way on the land road and the Yoshii River as the axis at the waterway. Also in Oku, the coastal area was the whole area. Fujino was separated from Akasaka and Oku in 721, Fujino is expanded in 766, but it is divided in the east west of Yoshii River in 788. As a result, the area will be fixed, as Sakaue station in Wake, Kama station in Iwanashi district, Takatsuki station in Akasaka. It is clear that the essence of Gun was in keeping Sanyo way.

研究分野：日本古代史

キーワード：律令地方行政システム シミュレーション 空間解析

1. 研究開始当初の背景

これまでに交付を受けた「GISを利用した古代地震の復原に関する基礎的研究」(科学研究費補助金 萌芽研究 研究代表者 岡山大学文学部・今津勝紀 平成15年～平成17年度)・「シミュレーションによる人口変動と集落形成過程の研究」(科学研究費補助金 萌芽研究 研究代表者 岡山大学文学部・新納泉 平成14年～平成16年度)・「時空間情報科学を利用した古代災害史の研究」(基盤研究(C) 研究代表者 岡山大学大学院社会文化科学研究科・今津勝紀 平成19年～平成21年度)・「シミュレーションによる古代家族の復原的研究」(挑戦的萌芽研究 平成23年～平成25年 研究代表者 岡山大学大学院社会文化科学研究科・今津勝紀)により、GISによる空間分析、時系列分析などの時空間情報科学の手法、プログラミング技術を習得し、それぞれシミュレーションを行ない、時空間情報科学の手法で得られた数理計算モデルが歴史の理解に有効であることを示した。本研究は、こうしたシミュレーションの手法を応用して、日本古代の地域社会像を再構築しようとするものである。

現在では、日本古代史研究に限らず、社会全体をめぐる議論への関心が低下しているのは否めないが、急速にグローバル化が進展する21世紀において、人類史の総体的認識が重要であることに変わりはない。19世紀の西欧に淵源する古典理論に依拠するのではなく、地球上の各地に拡散した人類の生活に即した地域社会史のレベルから、人類史全体を見通す作業が重要な意味をもつだろう。この点で歴史学は人類普遍の知の創造に大きく貢献できるはずである。

日本古代史研究では、永らく石母田正の在地首長制論の影響下にあり(石母田正『日本の古代国家』岩波書店、1971年)、現在でも古代社会を流動的な原生的共同体を基礎にした首長制社会として理解するのが通説となっているが(吉田孝『律令国家と古代の社会』岩波書店、1983年)、その後の研究で、在地首長なるものの姿を実証的に検証しえた研究は存在しない。この概念はあくまでも理念的な作業仮説であり、史料に即して地域社会の実態から導き出されたものではないのだが、このように抽象的に措定された地域社会像を一新する必要がある。

これまでも古代史研究の宿命である史料的制約を乗り越えるために、考古学の成果に学び、遺存地名や伝承を分析するなど地道な作業を積み重ねてきたところだが、それらの作業を前提としつつ、史料により確実に押さえられるところを基礎に計算モデルを構築する、シミュレーションの手法を援用するならば、より豊かな古代社会像を描くことができるのではと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、古代の吉備(美作・備前・備中・備後)を具体的フィールドに、空間シミュレーションの手法を活用して国・郡・里(五十戸・郷)の編成原理を明らかにする。古代の地域社会についての研究は、史料的制約が大きく、他時代の研究に比してその具体化は進んでいないが、この史料的制約を突破する可能性を秘めているのがシミュレーションである。これまで郡(評)は在地首長の歴史的世界と考えられてきたが、その内実は明らかでない。本研究では、空間シミュレーションにより、これら領域が、どのような空間認識により支えられ編成されているのかを明らかにすることで、新たな地域社会像を提示する。

3. 研究の方法

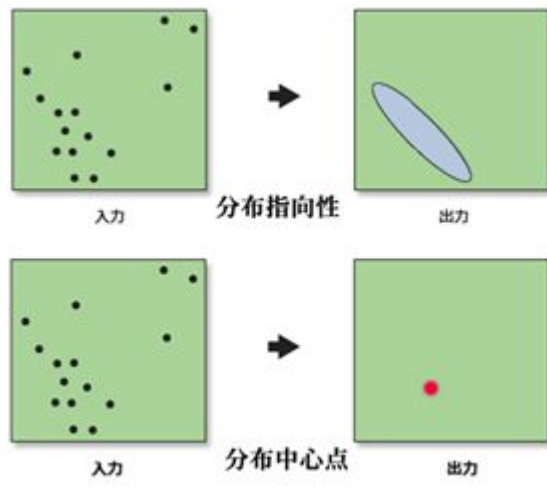
本研究では計算機上に空間を再現し、その空間を人間がどのように活用していたか、また認識していたか、その空間の意味を考える空間解析を行う。対象とする吉備(美作・備前・備中・備後)について、古地形を計算機上に復元し、その上に里(五十戸・郷)の分布を重ねることで、国・郡・里の仮想の行政空間を再現する。

吉備(美作・備前・備中・備後)を対象として、計算機上に標高メッシュデータをもとにした地形図を作成する。その際、現在の海岸線とは異なる古代の海岸線を復元し、当時の地理的空間に近づける。

郡(評)・里(五十戸・郷)の分布を復元する。郷には代替ポイントの座標を付与し、地形図をベースとして空間を計算により分割することで、仮想の国図を作成する。

寺院・官衙、官衙様遺構を集成し、それを結ぶ古道を地形の傾斜を利用して計算により求める。同じように、郷の代替座標をもとに、地形の傾斜を利用して、道を計算する。さらに水系を重ねることで、水陸の道を復元する。

地形図の土地の傾斜・植生・土壌などが



ら水稲耕作などの用益地、生産遺跡などの分布から山野河海の用益地を弁別し、仮想の古環境を復元する。

これら各要素をレイヤに重ねて構造化するとともに、分布指向性・分布中心点を計算により求めることで、郡や郷の編成がどのような空間を選択して編成されたものであったか、空間認識とその編成原理を明らかにする。

4. 研究成果

吉備全体の里(五十戸・郷)の比定を実施し、このうち備前と美作について具体的に検討した。備前国では北部六郡が和銅六年(七一三)に美作国として分離されるのをはじめとして、東南部で郡の分割・再編が頻繁に行われており、こうした郡域がどのような原理により編成されたのかを検討した。

まず『続日本紀』和銅六年(七一三)四月乙未条に「割2丹波国五郡1、始置2丹後国1。割2備前国六郡1、始置2美作国1。割2日向国肝坏・贈於・大隅・始良四郡1、始置2大隅国1」とあるように、和銅六年に備前国から北部の六郡、すなわち英多・勝田・苫田・久米・大庭・真島郡を割いて美作国が成立する。なお、苫田郡は貞観五年(八六三)に東西に分割されるが、こうした郡の東西分割は、阿波国名方郡をはじめとして、この時期以降、各地で見られるようになる。領域の再編成ではないため、ここでは検討の対象としない。

ついで、養老五年(七二一)に備前国邑久郡と赤坂郡から藤原郡が分離され(『続日本紀』養老五年四月丙申条)、この藤原郡が神龜三年(七二六)に藤野郡へと改称される(『続日本紀』神龜三年十一月己亥条)。さらに、天平神護二年(七六六)には「藤野郡者、地是薄瘠、人尤貧寒。差科公役、触r途忿劇。承2山陽之駈路1、使命不r絶。帯2西海之達道1、迎送相尋。馬疲人苦、交不2存濟1。加以、頻遭2早疫1、戸纔三郷、人少役繁、何能支弁」として、邑久郡の香登郷、赤坂郡珂磨・佐伯二郷、上道郡物理・肩背・沙石三郷の六郷と美作国勝田郡塩田村を以前からの三郷に併せることで、藤野郡の拡大がはかれる(『続日本紀』天平神護二年五月丁丑条)。この記事により当初の藤野郡が三郷からなる小郡であったことがわかるが、この時点で藤野郡は九郷からなる中郡へと拡大した(戸令定郡条)。

神護景雲三年(七六九)には藤野郡が改称され、和氣郡が成立するが(『続日本紀』神護景雲三年六月乙丑条)、延暦七年(七八八)に和氣清麻呂の建言により「中有2大河1、每r遭2雨水1、公私難r通。因茲、河西百姓屢闕2公務1。請河東依r旧為2和氣郡1。河西建2磐梨郡1。其藤野駅家遷置2河西1、

以避2水難1、兼均2勞逸1。許r之」として、吉井川の東西で和氣郡が分割され、吉井川の西岸に磐梨郡が成立する。それまで河東に存在した藤野駅家は河西に移され(『続日本紀』延暦七年六月癸未条)、これが兵部省式の珂磨駅家へとつながった。こうして編成された領域が、延喜式・『和名類聚抄』へと引き継がれてゆき、吉井川の河道の変化により多少の出入りはあるが近世へと継承されていった。

このように備前国では北部六郡が分離され、東南部で郡の分割・再編が行われるなど、郡の編成が頻繁に変更された。御野郡以下に大きな変化はなかったが、こうした変更の背景を考えた。

近世の郡の領域を明示することは可能であるが、古代では多くの場合、そうした線引きを厳密に行うことができない。そこで、五十戸(郷・里)の空間的な配置をもとに、郡域の分布指向性を示すこととしよう。分布指向性とは、空間上に散りばめられたポイントが、どのような分布の指向性をもつのか、それぞれの座標間の距離と偏差を計算し、標準偏差楕円を求めることで表現したものである。

郡を単位として五十戸(郷・里)がどのように分布するのかを空間的に示すことで、その領域がどのような意味をもったかを考えるのだが、それには郷(里)の座標が必要である。もとより五十戸は人為的な組織であり原理的に領域をもつものではない。郷長(里長)のもとに郡から符が下されることはあるが、郡衙のような恒常的な構造物が存在したわけではなかった。そのため厳密には座標など求めようもないのだが、郷名が地名化する場合があるように、その郷(里)に編成された人々が多く集住した場所は存在した。そこで、おおよそ、このあたりを中心に五十戸が編成されたと仮定して、そこにふくまれる小学校や郵便局などさまざまなものの座標で代替させることとした。それが以下の図である。

まず令制当初の赤坂郡は陸路では山陽道を、水路では吉井川を骨格として、後の美作国境までをその領域としていた。また邑久郡は播磨国境までの海岸部分全体を領域としていたが、それは海路によるものであった。天平神護二年(七六六)の藤野郡の拡大は「人少役繁、何能支弁」というものであったが、結局、「中有大河、每遭雨水、公私難通、因茲、河西百姓屢闕公務」ということで、延暦七年(七八八)に吉井川の東西で和氣郡が分割される。山陽道についていえば、和氣郡に坂長駅家、磐梨郡に珂磨駅家、赤坂郡に高月駅家がおかれることで、最終的な決着をみた。

これらの領域編成の本質は道にあったことが明白であり、官道の維持は律令地方行政システムの主要な柱であった。

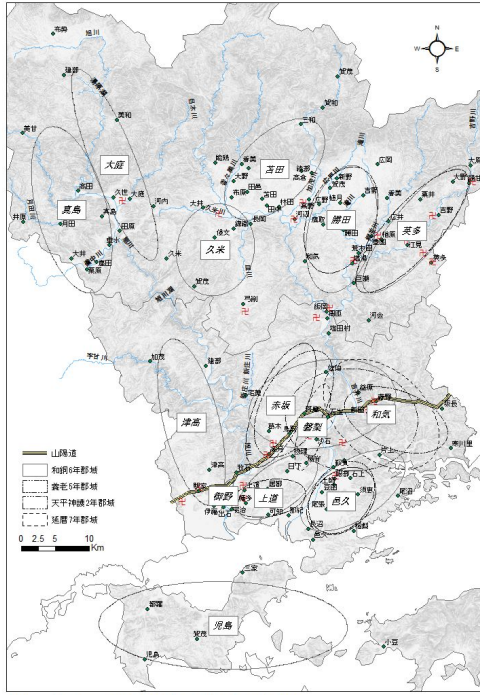


図1 備前・美作における郡域の変遷

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

今津勝紀「古代における国郡領域編成の一考察 備前・美作の事例」(吉川真司・倉本一宏編『日本的時空観の成立』思文閣出版 2017.5) p133-169 (査読無)

今津勝紀「日本古代地域史研究の新視点 空間分析と生態学的アプローチ」(『歴史評論』786、2015.10) p63-74 (査読有)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔その他〕
 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今津 勝紀 (IMAZU, Katsunori)
 岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
 研究者番号：20269971

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()